



「赤い靴」の少女 岩崎きみ

フリーライター

小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。

横浜港から外国へ連れられて行った赤い靴の女の子。今はどうしているのか。赤い靴や外国人を見かけるたびに、彼女のことを考える。そんな内容の童謡「赤い靴」はどこか物悲しい歌です。野口雨情が作詞、本居長世が作曲し1922年に発表されました。

歌い継がれて半世紀後。この歌にはモデルがいるという投稿が1973年11月17日の北海道新聞夕刊に掲載されます。書いたのは、主人公の妹だと名乗る道内在住の主婦でした。

その女性は母から聞かされた話として、姉は明治末期に米国人宣教師の養女となり米国へ渡ったと記しています。しかし、数年後には死亡し、どこに眠っているかは不明だということです。

女性の父鈴木志郎が勤めていた札幌の新聞社で同僚だったのが雨情です。志郎一家と雨情一家は、札幌郊外の山鼻に比較的広い家を借り同居していました。その時、母が雨情の妻に米国へ行った娘について話し、それを聞いた雨情が歌にしたのではと女性は書いています。

この投稿を読んだ北海道テレビ放送（HTB）のプロデューサー菊地寛は、歌のモデルとされる岩崎きみの足跡を調べようと思い立ちます。国内はもとより米国にまで足を運び制作したドキュメント番組が1978年に全国放送されました。翌年には菊地自らが執筆した本が出版されます。

それによると、きみは母かよの私生児として1902年に生まれ、かよが志郎と結婚する前、3歳にして札幌の米国人宣教師に引き渡されます。しかし、米国には渡航しませんでした。結核に侵され体力が弱り、外国へ連れていくことができなかったのです。東京の教会が運営する孤児院に預けられ、親との再会を果たせぬまま9歳で亡くなりました。

意外な結末に人々は驚き、同情したのでしょうか。以来、ゆかりの地に薄幸の少女像を建設する運動が相次ぎます。

最初の銅像は1979年、横浜港に面した山下公園に建てられましたが、1976年から募金活動が始まっており、



顔立ちがふっくらとした留寿都村の少女像

放送や出版に影響を受けたわけではありませんでした。像のタイトルは「赤い靴はいてた女の子」です。

1986年にはきみとかよの生地、静岡県清水市（現静岡市）の日本平に「赤い靴の女の子母子像」が建立されました。像はしゃがんだ母がわが子と向き合う姿です。

1989年には東京都港区の麻布十番に銅像が誕生しました。ここはきみが最後に過ごした孤児院があった場所です。広場にある像の足元には「きみちゃん」というプレートが付けられています。

留寿都 別れた母を思う姿

そして全国で4番目となったのが留寿都村です。村内には以前、社会主義の同志が新しい村づくりを目指して開墾した平民社農場がありました。志郎と結婚しこの農場で働くため、かよはやむなくきみを手放したのです。

きみの母がかつて住んでいたことから、村は「赤い靴」のメロディーを防災無線で流すなど、「赤い靴の里」づくりを進めていました。構想を推進するため、国のふるさと創生資金2,400万円を活用し1991年、国道沿いに「赤い靴公園」を造成、その中央部にシンボルとなるきみの像を建て、「母思像」と命名しました。

おしゃれなマントを羽織ったきみは、手にジャガイモの花を握り、大きな切り株に腰掛け、母が働いていた農場の方向をつぶらな瞳で見つめています。台座は



少女を思う「開拓の母」像

村内から掘り出した高さ1.4mの大きな自然石。奥行きがあり、きみをしっかりと支えています。

像を制作した米坂ヒデノリは、道外3カ所のきみ像を自分の目で確かめ、血縁関係者の話を聞き、北海道にふさわしい像を追求しました。その結果、かよわい少女のイメージを捨て、たくましさ表現するため、ふっくらとした顔立ちにしました。

像の前方に設置された石碑の説明板には「赤い靴」の歌詞が書かれ、その下にはきみの誕生から亡くなるまでの経緯がつつられています。

1991年11月7日の除幕式には、米坂や小学生らが招かれ、村のコーラスグループが「赤い靴」を合唱する中、きみの甥夫妻が幕を引きました。

それから6年後の1997年10月28日、きみ像から1kmほど離れた「赤い靴ふるさと公園」に、開村百年を記念し母かよの像ができました。「開拓の母」と名付けられた像は、右手にくわを持ち、左手を目の上当て遠くを見えています。その視線の先には母を慕うきみの像があります。

かよ像も米坂が手掛けました。母一人、子一人で育ったため、「僕の作品はおふくろ抜きで語れない」という米坂は、「自分の力で、きみちゃんのそばに母親を連れてこれることにほっとした」（北海道新聞2006年9月21日）と述べています。

像の周りに敷かれた4枚の板石には、留寿都村を含め全国4カ所のきみ像がそれぞれ描かれています。

小樽 親子3人を一緒に

一方、小樽は鈴木志郎が勤めた新聞社のあった地です。一時期、志郎は野口雨情とともに札幌の北鳴新報ほくめいしんぱうで働いていました。同じころ、石川啄木も札幌の北門新報にいました。雨情と啄木は文学仲間でした。

3人は1907年10月に小樽で創刊される小樽日報に勤務するため、札幌を離れます。雨情と啄木が就いたのは記者職。志郎は事務を務め、後に啄木の下で働くこととなります。

ここで啄木は同僚の志郎から社会主義の影響を受けたとみられます。後に歌集「悲しき玩具」に収められた「名は何と言ひけむ。姓は鈴木なりき。今はどうして何処にゐるらむ。」は志郎のことを詠んだといわれています。

翌年には小樽日報が廃刊となりその後、志郎一家は道内を転々としますが、晩年を過ごしたのが小樽でした。志郎と妻かよはともに小樽市内の中央墓地に埋葬されています。

2人はカトリックの洗礼を受け、富岡教会の門前で暮らし、同教会で葬儀をしたことから、「赤い靴」の悲話が明らかになると、信者たちは志郎一家に対する特別な感情を抱くようになります。

かよが小樽で最期まで気に掛けていたのは、幼くして手放した娘きみの行方だったのではないか。小樽と東京で離れ離れになって眠る親子を銅像にして一緒にしたい。

そんな思いから2007年2月には「赤い靴・親子の像」建設委員会が発足、委員長には信者で元小樽市医師会長の高橋昭三が就任しました。6月から始めた募金は、一般市民のほか、医師会会員や全国のカトリック信者からも集まり、目標の650万円を大きく上回る920万円に達しました。



小樽運河の近くにある親子3人像

制作を引き受けたのは、同じ教会に通う信者の造形作家ナカムラアリです。像はきみとかよが笑顔で手を重ね、継父の志郎がそっと後ろで寄り添う構図。両親の愛情を知らずに死んだきみが、天国では親子一緒に幸せに暮らすという設定です。3人の像のバランス、視線や手の位置などに配慮し、試行錯誤を繰り返しました。

台座には「赤い靴 親子の像」と記され、その下に「赤い靴」の一番の歌詞が刻まれています。またボタンを押すと、この歌のメロディーがオルゴールで流れる仕掛けになっています。

当初は丘の上にある富岡教会の敷地に建立する計画でしたが、全国各地から予想以上の反響があったことから、市民や観光客が訪れやすい小樽運河北端の運河公園に、市の許可を得て変更しました。

除幕式が行われたのは志郎の命日となる11月23日。雪景色の中、委員長の高橋や制作者のナカムラアリが幕を引くと、微笑ましい親子の姿が現れました。その後、市内の合唱団が像を囲んで「赤い靴」を斉唱し、全国初となる親子3人像の完成を祝いました。

建設委員会の結成から銅像完成までわずか9カ月という手際の良さ。これほど短期間で出来上がったのは、地元の協力に加え、募金活動も銅像制作も気心の通じた人たちがお互いに助け合ったからでしょう。

建設委員会は2008年9月、「おたる赤い靴の会」を設立、銅像の維持、管理や会報の発行を行ってきました。そして2012年7月、解散に伴う維持、管理業務を小樽グリーンライオンズクラブに引き継ぎました。

函館 希望詰めたバッグ掲げ

函館では、ほかの地域に「赤い靴」の銅像が建つことに、いらだたしい思いをする人がいました。留寿都と小樽にきみとの接点はありませんが、函館は母かよときみが住んでいた土地で、札幌の米国人宣教師に引き取られて行く「母子別離の地」でもあるからです。

市民有志が2008年、銅像建設を決意、募金活動に動

きだします。その心境について、はこだて赤い靴の会長の宮崎衛^{まもろ}は「一昨年夏、孫とともに旭川・旭山動物園へ旅行した折り、バスガイド嬢が『赤い靴はいてた女の子』が函館にいたと語り始めた時には本当にびっくりした。新聞にも『赤い靴の少女像』待望論。こりゃやるっきゃないか」（北海道新聞道南版2008年8月27日）と書いています。

制作は函館出身でローマ在住の彫刻家小寺真知子に依頼しました。すでに函館のペリーや土方歳三の銅像を手掛けるなど、数々の実績を残していました。小寺が仕上げたきみ像は赤い靴を履き、左手にバッグを提げています。そこには愛と夢と希望が詰まっているという想定です。

目標とする1,500万円の事業費を工面するため、全国に募金を呼びかけたほか、小像10体を制作し1体60万円で販売。会員自ら函館の街頭に立ち、募金活動を展開しました。

建設場所は末広町の広場で、像の背後には函館港が広がっています。近くには観光名所の赤レンガ倉庫群があります。台座には「赤い靴の少女像」というプレートがはめ込まれ、その脇には童謡「赤い靴」の歌碑も設置されました。

2009年8月7日の除幕式では、宮崎や小寺らが幕を



函館港のそばに立つ少女像

引きました。小寺は「短い生涯を閉じた少女の像が、函館のシンボルの一つになってくれれば」と期待を込めたあいさつをしました。

宮崎は2022年9月、小寺の没後10年の節目として、保有していた小像を七飯町へ寄贈しました。きみの母かよの結婚相手、鈴木志郎が一時、同町大沼の雑貨店で働いていたことから、同町も「赤い靴」ゆかりの地だと考えたのです。

こうした中、2007年12月、作家の阿井涉介^{あいしやうけい}がきみは「赤い靴」のモデルではないと主張する本を出版しました。それ以降、賛同する意見が出るようになります。

その理由は、①きみは戸籍上「佐野きみ」となったが、米国人宣教師の養子にはなっていない、②きみは外国に渡っていない、③志郎が札幌で雨情と同じ新聞社にいたという資料はない、④モデルの存在について雨情は言及していない—などです。

しかし、真相は分からぬまま、薄幸の少女きみが童謡のモデルであるという菊地寛説は人々の間に浸透し、定着していきます。阿井の異論が出た後も、函館を含め全国で碑像の建設がやむことはありませんでした。

2010年11月には、志郎の生まれ故郷、青森県鮎ヶ沢町^{あじがさわ}に親子3人が仲良く手をつなぐ銅像が建てられます。また札幌では、志郎一家と雨情一家の同居が「赤い靴」作詞のきっかけだったとして、市民有志が2015年6月、山鼻公園に歌碑を建立しました。

(敬称略、肩書は当時のもの)

<参考文献>

- ・菊地寛「赤い靴はいてた女の子」現代評論社、1979年
- ・留寿都村「広報るすつ」1991年12月号
- ・阿井涉介「捏像 はいてなかった赤い靴」徳間書店、2007年
- ・福地順一「童謡『赤い靴』のモデルについて」『国語論集11』北海道教育大学釧路校、2014年